

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 32

1989年12月10日

## 第32号 目 次

1. 理事会報告
2. 会員活動報告
3. 学術・文化情報
4. 近着会員業績
5. 事務局から
- 次期大会のお知らせ

### 1. 理事会報告

○第42回理事会議事録要旨

日時：1989年7月8日(土)

場所：上智大学

出席：細野、アンドラーデ、松下、清水、大井、原田、中川(委任)、山田(書記)

[報告事項]

- 1) 10周年記念事業と役員選出方法に関して前大会会場で行なわれたアンケートについて説明(理事長)、欠席会員からの意見は次回理事会で検討することにした。
- 2) 大会費用に関する報告(大井大会準備委員長)、学会からの大会費15万円のほか、主催校から約13万円の支給があった。

[審議事項]

- 1) 第41回理事会議事録の確認
- 2) 前総会議事録の確認
- 3) 役員選出方法について。アンケートと理事から出された諸案の長所と短所を検討し、現行方式を維持しつつ、欠席予定者による不在投票を理事選挙規則の改正により可能にする方向で検討を続けることに決定した。
- 4) 10周年記念事業について。以下の案を中心にさらに検討：a) L A S A 関係者が刊行した *Changing Perspectives of Latin American Studies* の翻訳と刊行、b) 日本人ラテンアメリカ研究者の業績リストな

いし書誌の作成と刊行、c) 主要研究機関の収集雑誌目録の整備と刊行。

- 5) 次期大会について。恒川会員(東京大学)に大会準備委員長受諾を打診し、他の準備委員についても相談した上で理事会で決定する。
- 6) 年報編集について。松下編集委員長より、書評の充実をめざし、短いものを多く載せる、編集関係の運営委員2名を委嘱したいなどの報告と提案があり、了承された。なお、編集会議を2回程度名古屋で開催できるよう予備費からの支出が決定された。
- 7) 新入会員の承認。村上忠喜、鈴木 茂、竹村 卓の3氏の入会が承認された。
- 8) 東日本部会で外部講師を招き、研究会を行なうことが了承された。

○第43回理事会議事録要旨

日時：1989年10月28日(土)

場所：上智大学

出席：細野、アンドラーデ、中川、原田、住田、松下、国本、山田(書記)

[報告事項]

- 1) 前大会総会欠席者を対象とするアンケート回答を回覧。
- 2) 年報編集(松下)：a. 論文2点などすでに投稿あり、b. また若干の応募依頼を行っている、c. 編集関係の運営委員の委嘱はもう少し時間が必要、d. 次回理事会で事後承認得たい旨の報告があった。
- 3) 10周年記念事業に関する提案：
  - i) アンドラーデ提案：米国 L A S A 編の *Changing Perspectives of Latin American Studies* の翻訳と出版は不適當で、主要研究機関所蔵の収集雑誌目録を編纂し刊行する方が望ましい。
  - ii) 山田提案：以前刊行されたラテンアメ

リカ研究者名鑑を参考にその改訂版に当たるものを編纂したいが、予算など引続き検討する必要がある。

4) 国際交流 (アンドラーデ) :

i) 10月にプエルトリコで行われる予定だった米国LASA大会は、ハリケーンのため12月4-6日にマイアミで行われることになり、アンドラーデが主催する日本-ラテンアメリカ関係に関するラウンド・テーブルは中止となった。

ii) 日本-中米関係に関するセミナーを実現する方向で実行委員会の設置および資金について検討されている(学会との関係は未定)。

5) 次期大会(理事長): 次期大会会場校(東京大)の恒川会長が準備委員長就任を受諾したので、委嘱する。

[審議事項]

1) 次期大会について(大会準備委員長恒川)

i) 来年6月9、10日を第1候補日、2、3日を第2候補日として、準備したい。

ii) 理事会から清水、国本の両理事を準備委員とし、大貫、高橋均両会員を運営委員とする。iii) シンポジウムのテーマと報告者の選定は準備委員会で検討するが、恒川案として、「環境(自然と都市)」「日本とラテンアメリカ」などを検討中。iv) 記念講演者を打診中、v) 大会費として30万円を支出。

2) 年報編集: i) 原則として依頼原稿に対しても審査を行う。ii) 1月末まで応募が可能なので、各理事が周辺に投稿を依頼する。iii) 書評にたいする反論は、同一号に掲載するが、再反論は会報に載せる。

3) 10周年記念事業: なお検討を続ける。

4) 役員選出方法: 理事選挙規則第4条第1項の終わりに次の文をつけ加える: 「ただし、総会に欠席を予定し、かつ投票権の行使を望む会員は、選挙管理委員会の定める方式により、事前に郵送による不在者投票を行うことができる。」この件に付いては、中川和彦会員に相談する。

5) 国際交流: 原田理事より El Colegio de Mexico 田中教授から第2回目墨シンポ

ジウムを日本で開催したく、本学会に共催協力を打診してきた旨報告があり、第1回に本学会が関与していない今までの経過からみて、協力保留に決定。

6) 入会審査: 斉藤泰雄(国立教育研究所)、高山秀幸(摂南大学)の2氏の入会承認。

## 2. 会員活動報告

### i) 定例研究会

#### ○東日本部会研究会

国際セミナー「ラテンアメリカ都市化過程の特質」(筑波大学ラテンアメリカ都市研究会との共催)

さる10月23日から27日まで筑波大学で本学会会員を中心とする筑波大学の研究者4名とラテンアメリカの著名な都市研究者4名の間で国際セミナーが行われた。本来の性格は、文部省の科学研究費補助金制度の海外学術研究による海外研究分担者3名の招聘と研究総括であったが、日本住宅協会の国際居住年記念基金平成元年度国際交流助成事業によってさらに1名の招聘が可能になり、さらに本学会の会員にも研究交流に参加してもらおうという趣旨から、最初の2日間のみが東日本部会の研究会として公開された。同大学の研究者やラテンアメリカ研究関係の大学院生(修士課程地域研究科、博士課程歴史人類学研究科)約10名以外にも、学外会員からは3名が傍聴した。研究発表と討議は、一般聴衆と報告書の都合で今後の研究計画などに関する内部討論を除き、英語で行われた。

筑波大学におけるラテンアメリカ都市研究は、かつてのラテンアメリカ特別研究プロジェクト(1978-1982年)のなかでも重要な分科会の一つとして発足し、「ラテンアメリカの都市首位性拡大の諸要因に関する学際的研究」という研究課題を掲げ、文部省科研費の助成を受け、研究代表者を交代しつつ、昨年までほぼ1年おきにメキシコ(代表細野)、ブラジル(中川)、アルゼンチン(山田)と3回の現地調査を積み重ねてきた。本年度は、アルゼンチンの研究と全体の総括を行うことになっており、今回の国際セミナーを経て、英

文で報告書を刊行する予定である。

今回のセミナーでの発表者、所属機関、研究発表は以下のようであった：

Gustavo Garza (Centro de Estudios Demográficos y de Desarrollo Urbano, El Colegio de México), "The Metropolitan Character of Urbanization in Mexico."

Roberto Ham Chande (El Colegio de la Frontera Norte, Tijuana), "Demographic and Urban Aspects of Mexico's Northern Border."

Jorge E. Hardoy (Instituto Inter-nacional de Medio Ambiente y Desarrollo, IIED-AL, Buenos Aires), "The Process of Urbanization in Argentina: Past Trends and Present Issues."

細野昭雄 (筑波大学社会工学系), "Economic Development and Urbanization in Mexico."

中川文雄 (同歴史人類学系), "Formation of an Enlarged Metropolitan Complex and the Tendency of Primacy in Brazil."

Milton Santos (Departamento de Geografía, Universidade de São Paulo), "Modernity, Techno-Scientific Milieu and Urbanization in Brazil."

高橋伸夫 (同地球科学系), "The Urban System in Argentina."

山田睦男 (同歴史人類学系), "Patterns of Latin American Urbanization: Argentina Compared with Mexico and Brazil."

セミナーの開催期間中日光へのエクスカーションが行われたほか、外国人4氏は終了後東京・関西などにも足を伸ばし、京都では大井邦明会員から京都文化博物館案内、会食などの協力を受け、日本の秋を楽しんで帰国した。

関係者は、今回のような催しがいろいろな分野で頻繁に行われ、日本におけるラテンアメリカ研究が活性化し、本学会とラテンアメリカの学会との交流が一層緊密になることを願っている。  
(記 山田睦男)

## ○西日本部会研究担当理事からの提案

「中部アメリカ特集 —

著・訳者と語る会」の提案

原田金一郎

前号『会報』において「中部アメリカ」という呼称の積極的使用を提唱したが、いまのところ会員諸氏からの賛否の声が筆者のもとまで届いていない。そこで、かさねて問題提起をかね、以下のように本年度の部会研究会の計画を提案したい。

(1) 西日本在住会員にとって、同じ会員の著・訳書であれ、それについて直接語りあえる機会はまずない。そこで、理事会で予算の増額を認められたことでもあり、東京から著・訳者を呼んで直接語りあう会を提唱したい。

(2) 同時に、学会外の研究者によるラテンアメリカ関係書についても、同様の会を企画してみたい。この場合、予算との関係から、まず対象者を関西在住者に限定したい。

(3) ただし、従来通りの西日本在住会員による研究報告を排除するものではない。少々窮屈ではあるが、2本立ての研究会もあってよいと考える。

(4) 以上のような企画と、前号で小生が提唱した「中部アメリカ部会」案を組み合わせ、本年度の対象書物をメキシコ、中米およびカリブ地域に関するものにしてみたい。対象者・書の原案は以下の通りである。

川北稔 (訳) 『甘さと権力』平凡社

清水透『エル・チチョンの怒り』東京大学出版会

高橋均『サンディーノ戦記』弘文堂

池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開』ミネルヴァ書房

以上の提案にたいする御意見および報告希望の連絡を本年末までにお送りくださるようお願いいたします。なお、部会研究会そのものは、明年1-5月、月1回土曜日に大阪でおこなう予定です。また、南山大学においてももう1回従来通りの研究会が計画中です。

(連絡先) 〒652-91 兵庫郵便局

私書箱8号

ii) 第1回国際マヤ研究者会議に出席して  
落合 一泰

本年8月14日から19日まで、メキシコ国チアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサス市にて、メキシコ国立自治大学マヤ研究センター主催の『第1回国際マヤ研究者会議』Primer Congreso Internacional de Mayistas が開催された。これまで、メキシコ・シティ(1985年)とカンパチェ(1987年)で2度開かれた『国際マヤ研究者集会』Coloquio Internacional de Mayistas が予想以上に盛会だったことから、今回「集会」から「会議」に格上げされたものである。今回も300名を超える参加者があり、古代から現代にいたるマヤ地域の文化が、考古学、形質人類学、言語学、エスノヒストリー、民族学など様々な角度から検討された。本稿では、個々の研究報告には触れず、会議全体の問題点、新しい動向、その社会的意味などにつき、筆者の感想の一部をまとめておきたい。

会議が進行するなかで浮き彫りになった問題のひとつは、マヤ研究が様々なレベルで内向化している点である。具体的には次の3点を指摘できよう。(1)マヤ領域を形成するユカタン、チアパス、グアテマラ各地方の研究が孤立しており、相互の対話や総合化への姿勢が欠如している。(2)マヤ領域と外界の関係を論ずる報告がない。(3)メソアメリカ文化全体のなかにマヤ文化を位置づけようという視点がみられない。

これらは、外部に対してはひとつの特色ある先住民文化伝統を見せつつも、内部的には文化的にも政治的にも統一されたことのないマヤ領域の研究に、常に付随してきた問題点である。過去の優れたマヤ研究は、常にこの殻を破ろうとする努力のなかから生まれてきた。しかし今回の会議では、内向化傾向が一段と強まっていたと思う。狭い意味での地域研究に終始し、普遍的な文化史・社会研究への貢献を模索せずにいると、この種の会議は、今回のように、ややもすると「マヤ同好会」的な満足感をもって終わる危険性がある。このような危惧から、筆者は、1992年に予定される次回の会議では、メソアメリカというより広いパースペクティブの強調、地域や方法のみならずテーマ別セッションの設定、マヤ専門家でない学者によるマヤ研究の評価などが必要であることを主催者に提案した。

マヤ研究では、当初から考古学と言語学の比重が高いが、50年代から70年代にかけて民族学的研究が急増し、最近ではエスノヒストリー研究も成果を挙げている。今回の会議では、エスノヒストリーがさらに有力になりつつある反面、民族学関係の発表の減少が目についた。これは、50年代以降チアパスの民族学研究をリードしてきたHarvard Chiapas Projectの終了と無関係ではない。全体的に見ても、先住民諸語の訓練を積んだ民族学徒の不足が感じられた。

その一方で、マヤ先住民のグループがチアパスのみならずグアテマラからも参加し、言語とアイデンティティ、文字言語の開発などについて、研究者と2日間にわたり熱い論議を交わしたことが注目される。このような先住民自身の参画、マヤ研究の応用面の強調などは、これまでの学会に見られなかった新しい動きであり、先住民の研究「対象」からの脱皮のきざしを印象づけた。これは、まだ一部の先住民の動きにすぎないが、このような方向性は、今後さらに強まることだろう。

会議のあいだ、受付やレセプションでは、地元のメスティソ青年たちが、チアパス地方先住民の民族衣装をまとめて参加者に対応していた。メスティソが先住民の服を公式の席で着用するなど、保守的なサン・クリストバル市では、以前なら考えられないことだった。先住民文化が社会的に認められてきたとも言えようが、これまでその価値を否定し続けてきたメスティソ社会が、観光資源としての先住民文化の利用を強めてきたあらわれとも言える。学会も参加者個々人も、民族関係の渦中にあることを、あらためて実感させられた次第である。

iii) 第25回AJELB(ポルトガル・

ブラジル学会) 定期大会報告

三田千代子

第25回ポルトガル・ブラジル学会(Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros-AJELB)\*が10月21日(土)、22日(日)に国際文化会館及び上智大学でそれぞれ開催された。凡そ30名の会員が関西、関東より参加した。大会第1日目には、上智大学客員教授として来日中の、パラナ連邦大学(UFPR) Basilio Agostini教授(言語学専攻)のブラジルの現代ポルトガル語について報告があっ

た。話言葉の社会差及び地域差について大変興味ある発表で、活発な討論が展開された。引き続き研究報告が行われた。2日目には総会が開催された。次期大会は1990年10月20日、21日に学会創設25周年記念大会が上智大学で開催される予定である。本年度大会の研究報告及び報告者は以下の通り。

1. "Situação Atual de Língua Portuguesa no Brasil," por Prof. Basilio Agostini (UFPR).
2. "Comunicação Não-Verbal: Um Estudo Comparativo entre o Japão e o Brasil (II)," por Profa. Noêmia Hinata (Univ. Sofia).
3. "Aspecto Geral do Movimento Feminista no Brasil" por Profa. Chiyoko Mita (Univ. Sofia).
4. "Relações Luso-Nipónicas: Um Projeto para os Anos 90." por Prof. José Álvares (Univ. de Línguas Estrangeiras de Tokyo).

\* AJELBは1965年に、日本のポルトガル語研究者及びポルトガル、ブラジル研究者の研究促進の場として設立され、毎年定期大会を開催し、研究年報 *ANAIS* をポルトガル語で発行している。来年度より、日本語とポルトガル語のどちらでも *ANAIS* への投稿が可能となった。現在、会長はV. Lorschaiter (上智大学) で、会員は日本人、ポルトガル人、ブラジル人54名を数えている。事務局は上智大学ポルトガル・ブラジルセンター内 (☎238-3536) に置かれている。

#### iv) 第26回ラテン・アメリカ政経学会全国大会 住田 育法

10月21日(土)と22日(日)の両日、神戸大学経済経営研究所で、約50名の会員を集めて、第26回ラテン・アメリカ政経学会が開催された。第1日目は、自由論題により以下の研究報告が行われた。

1. 「ブラジルにおける自動車産業の発展過程 — 組立部門の競争形態と部品部門の構造変化 —」 田中裕二(北海道情報大学)
  2. 「メキシコのマクロ経済変動」 石黒馨(阪南大学)
  3. 「開発計画の政治経済学 — メキシコを中心として —」 湯川攝子
- 2日目は、午前中、自由論題によって以下

の研究報告が行われた。

1. "A Comparative Study of the Economic Performance of Latin American and Asian NIES" Carlos Aquino (神戸大学)
  2. 「世界のなかのハイチ革命」 青木芳夫(奈良大学)
  3. 「スペインのEC加盟とラテン・アメリカ」 石井陽一(神奈川大学)
- 午後からは、『ラテン・アメリカの累積債務問題』を共通論題として、西島章次(神戸大学)の司会に従って、つぎの報告と討論が行われた。
1. 「ブラジル連邦議会における累積債務問題」 有水博(大阪外国語大学)
  2. 「ラテン・アメリカの累積債務問題と日本の公的資金協力」 岸本憲明(日本輸出入銀行)
  3. 「累積債務問題の現状と対策」 宮島茂紀(アジア経済研究所)

3氏の報告では、「累積債務問題」をめぐる最新の経済情報や連邦議会の議事録など、現実的な視点からの重要資料が提供された。続く討論ではこれらを踏まえて、ラテン・アメリカのみではなく、日本をも含めたグローバルな視座からの熱心な意見交換がすすめられた。「南北問題」の視点の必要性などが指摘されたものの、「債務問題」の実際の行方を考える機会が与えられ、極めて興味深い討論となった。

### 3. 学術・文化情報

#### i) LASA大会の延期

9月21-23日にプエルトリコ・サンファン市で開催予定の米国ラテンアメリカ学会(LASA)第15回大会は、カリブ海域を襲った今世紀最大といわれるハリケーンのため延期された。その後米国マイアミ市に会場を移し、12月4-6日に開催されることになった。

#### ii) 上智大学イベロアメリカ研究所創立25周年記念シンポジウム開かれる

日時 1989年12月9日(土)午後2-6時  
場所 上智大学・中央図書館棟9階921会議室  
テーマ 「日本とラテンアメリカの関係—回顧と展望」

## 第1部 経済協力

## 第2部 文化・学術交流

### iii) 1989年度文部省科学研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域関係課題一覧

#### 【一般研究】

- 「環太平洋地域の国際協調と経済発展に関する理論的実証的研究」 西向嘉昭（神戸大学経済経営研究所）

#### 【奨励研究A】

- 「ペルーと南米諸国の軍部の政治思想の比較研究（1880-1970年）」 大串和雄（山形大学人文学部）
- 「ラテンアメリカ地域を対象とする医療人類学の基礎的研究」 池田光穂（国立民族学博物館特別研究員）

#### 【国際学術研究】

- 「南半球極地域の永久凍土の形成とそれに及ぼす気候変動の影響」（アルゼンチン・チリ・その他） 福田正己（北海道大）他9名
- 「ブラジルのアルカリ複合岩体に見られる希土類鉱物、放射性鉱物の調査研究」（ブラジル） 床次正安（東大）他8名
- 「環境資源利用をめぐる比較人類生態学—ボリビア第2次調査」（ボリビア） 柏崎浩（東大）他6名
- 「環太平洋地域における第四紀後期地震性地殻変動調査（第2次）」（チリ・ニュージーランド・アメリカ） 太田陽子（横浜国立大）他10名
- 「ブラジルの民衆文化に関する研究—宗教を中心に」（ブラジル・アメリカ） 中牧弘允（国立民族学博物館）他5名
- 「新世界ザルの生態と社会構造の比較研究」（コロンビア・ブラジル・ペルー） 伊澤紘生（宮城教育大）他5名
- 「ラテンアメリカの都市首位性拡大の諸要因に関する学際的研究—主要3カ国の比較分析」（アルゼンチン・メキシコ・ブラジル） 山田睦男（筑波大）他7名
- 「ブラジル北東部における土地利用・水利用の変遷と生態系の地域的变化」（ブラジル） 西澤利栄（筑波大）他9名
- 「ミナミプナ林の時空分布について」（チリ） 西田誠（千葉大）他4名
- 「古代アンデス文明の生成過程の研究」（ペルー・アメリカ） 大貫良夫（東大）

他6名

- 「日本と南米太平洋側の新第三紀地質学的事件の対比」（チリ・コロンビア・ペルー） 土隆一（静岡大）他10名
- 「熱帯新大陸における広鼻猿類の種分化に関する研究」（コロンビア） 野上裕生（京都大）他4名
- 「中南米の寄生吸虫症、特にヴェネズエラにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」（ベネズエラ） 辻守康（広島大）他8名
- 「南米における沖縄県出身者移民に関する地理学的研究第3次調査」（ブラジル・ボリビア） 中山満（琉球大）他5名

#### 【共同研究】

- 「『イベリア系文化圏』における農村共同体の再編と都市の変容」（相手メキシコ・エコロジー研究所） 清水透（東京外語大）他8名
- 「チャカルタヤ山におけるUHE宇宙ガンマ線の研究」（相手ボリビア・サンアンドレス大学物理学研究所） 金子達之助（岡山大）他6名
- 「ヘビとコウモリの赤外線情報処理機構の比較」（相手ベネズエラ国立科学研究所） 岸田令次（横浜市大）他4名

#### 【大学間協定】

- 「大深度用海洋構造物に関する研究」ブラジル・サンパウロ大学・横浜国立大（竹沢誠二他11名）

## 4. 近着会員業績

〔抜〕 角川雅樹「第10回メキシコ精神医学会の報告から」（『季刊 精神療法』第15巻 第1号 1989年1月）

〔抜〕 TSUNOKAWA, Masaki, "La actitud de los intelectuales mexicanos y japoneses hacia las culturas europea y norteamericana; un estudio antropológico desde el punto de vista psicológico" (*HOMINES*, Universidad Interamericana de Puerto Rico, Vol. 12, Num. 1 y 2, Marzo, 1988-Enero, 1989)

〔抜〕 今井圭子「『マルティン・フィエロ』を読む—アルゼンチン近代化の光と陰—」（『ラテンアメリカ—歴史の中の文学—』上智大学イペロアメリカ研究所、清水憲男

編、1989年)

〔抜〕 松下直弘「文学と民間伝承—フワン・ルルフォの作品に見られる『ジョローナ』の伝説—」(『ラテンアメリカ—歴史の中の文学—』上智大学イペロアメリカ研究所、清水憲男編、1989年)

〔抜〕 高橋都彦「ブラジル文学におけるインディオ」(『ラテンアメリカ—歴史の中の文学—』上智大学イペロアメリカ研究所、清水憲男編、1989年)

〔抜〕 宮野啓二「南・北アメリカの比較経済史的考察—イギリス植民地とスペイン植民地—(1及び2・完)」(『広島大学経済学論叢』第12巻第3号 1989年2月、第4号 1989年3月)

〔抜〕 Sugiyama, Saburo. "Burials dedicated to the old temple of Quetzalcoatl at Teotihuacan, Mexico" (*American Antiquity*, Vol. 54, No. 1, 1989年)

〔抜〕 辻豊治「ラテンアメリカにおけるインフォーマル経済をめぐる諸問題」(『歴史と地理』通巻396号、1988年8月)

〔抜〕 辻豊治「ラテンアメリカにおける都市化とインフォーマル・セクター—その機能に関する3つのアプローチ—」(『コスミカ』XVII号 京都外国語大学、1988年3月)

〔籍〕 国本伊代『ボリビアの「日本人村」—サンタクルス州サンファン移住民の研究』(中央大学出版部 1989年)

〔誌〕 上智大学イペロアメリカ研究所『イペロアメリカ研究』11巻1号(1989年8月)

〔冊〕 同上『ラテンアメリカ文献目録—1987年』(1989年)

〔抜〕 奥山恭子「ラテンアメリカの家族研究(メキシコを中心に)」(比較家族史学会編『比較家族史研究』第3号)

〔抜〕 奥山恭子「メキシコの法制度」(『ラテンアメリカ諸国の法制度』アジア経済研究所 1988年)

〔抜〕 奥山恭子「ラテンアメリカにおける『氏』」(『家の名・族の名・人の名』シリーズ家族史3 三省堂 1988年)

〔抜〕 奥山恭子「発展途上国の法秩序—ラテンアメリカを中心に—」(『現代法社会学』青林書院 1989年)

〔抜〕 奥山恭子「ラテンアメリカのアンパロと家族関係訴訟—メキシコを中心として(1)」(『帝京国際文化紀要』第1号、

1989年9月)

〔冊〕 青木芳夫『エクアドルの民話』(資料ラテンアメリカ 特集シリーズ5) ラテンアメリカ資料センター 1988年6月。

〔冊〕 青木芳夫『アマゾンの民話3』(資料ラテンアメリカ 特集シリーズ7) ラテンアメリカ資料センター 1989年3月。

〔抜〕 内多允「コロンビアの化学工業—典型的な国内市場依存型産業—」(『化学経済』Vol. 36, No. 10, 1989年9月)

〔抜〕 内多允「ペルーの化学工業—インフレ抑制が最重要課題—」(『化学経済』Vol. 36, No. 11, 1989年10月)

〔抜〕 田中高「新デタントと中米粉争」(『外交時報』1989年7月号)

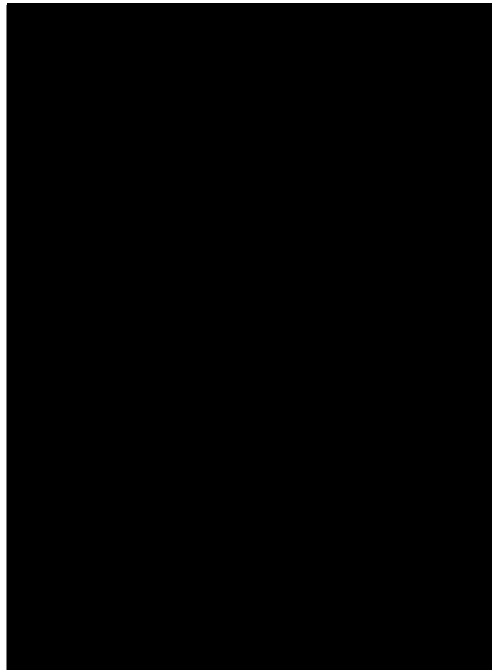
〔抜〕 田中高「エルサルバドル：政治経済変動—ドゥアルテ政権の退場と大統領選挙—」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 6, No. 1, 1989年)

〔抜〕 田中高「キューバ・ソ連関係の新しい展開」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 6, No. 3, 1989年)

〔籍〕 日本総合研究所『ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究』(1989年)

## 5. 事務局から

i) 新入会員(第42・43回理事会承認)



## 1990年第11回定期大会のお知らせ

### 日程とテーマ

1. 期日：1990年6月2日(土)、3日(日)
2. 会場：東京大学教養学部
3. 第1日目：総会（役員選挙を含む）、  
記念講演、懇親会  
第2日目：自由論題報告、  
シンポジウム「日本における  
ラテンアメリカ認識とラ  
テンアメリカ教育」

第2日の自由論題報告については、分科  
会編成のため別途報告希望者を募集します。  
シンポジウムでは、日本における一般のラ

テンアメリカ認識の特徴は何か。その原因  
は何か、我々の教育・情報提供活動の役割  
は何か、といった問題群について、広い分  
野のパネラー（日本人、ラテンアメリカ人）  
から、経験に基づく報告を受けて討論する  
予定で、この企画についての意見・希望を、  
大会事務局で受け付けます。尚来年は役員  
選挙の年でもあり、できるだけ多数の会員  
の参加を期待しています。

大会事務局住所：

(〒153) 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学教養学部中南米科気付  
第11回定期大会組織委員会事務局

### iii) お願い

会報に業績掲載希望の会員の方は、業績の  
全文を学会事務局へご送付下さい。

### 編集後記

会報の印刷をお願いしてきたアトム印刷の経  
営者篠崎隆之氏が10月20日に急逝された。気  
さくに待ち合わせ場所まで原稿を受け取りに  
来て下さった氏の姿が目に残る。心よりご冥  
福をお祈り申し上げます。(国本伊代)

No. 3 2

1989年12月10日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎0298-53-5067